

62 もくぞうあいぜんみょうおう ざ ぞうおよ きょうじ もくぞうりょうかいだいにちによらい ざ ぞう 木造愛染明王坐像及び脇侍木造両界大日如来坐像



指 定 市有形文化財 平成元年11月6日
所在地 志 賀
所有者 法 禅 寺



本像は、真言宗熊野山法禅寺の本尊および脇侍である。

本尊愛染明王坐像は像高68cm、一木造り式寄せ木造りで極彩色を施す。三眼六臂、焰髪ろっぴの頂上に獅子をいただき、光背は愛染明王独特の日輪型で中央に火焰を透かし彫りする。

脇侍の両界大日坐像はいずれも一木造り式寄せ木造りで、金粉まき立て。像高は胎蔵界大日が54.5cm、金剛界大日は50cm、いずれも舟型光背で、唐様五重の台座。

朱塗りの愛染明王とまばゆいばかりの両脇侍、両者ともに堂々として本堂内を威圧する。

本像は、元禄16年（1703）壇徒の一人が京都の仏師に彫らせたもので、作料は3体合わせて20両であった。

この像は

- ・制作年代・制作者・寄進者が明らかであること、
- ・元禄期の京仏師の作であること、
- ・大日如来を主尊にし、脇侍に不動明王・愛染明王を置くのが普通であるのに、ここでは愛染明王を主尊に据えて、両界大日を脇侍に置いた珍しい形態であること、
- ・金剛界大日の白毫はくごう（仏の眉間にある白い毛）が欠落しているほか、ほぼ完形であること、

などの点が、きわめて貴重なものである。

なお、同所に安置されている木造真言八祖坐像なども、同年代に同仏師の手に成るものである。